


団体名	こどもフォーラム	活動タイトル	子どもの声を聴く、子どもアドボケート専門講座		
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景		
●望ましい社会状況(ビジョン)	子どもも大人と共に社会をつくる市民の一人として尊重され、子どもの参加と意見表明権が保障されていること。そして、子どもが一人の人として尊重される社会であり、子ども自身が国連「子どもの権利条約」に示される自らの持つ権利を知っていること。大人も、子どもの権利を理解し、保障できる社会であること。子どもの声が大人数によって疎外することなく子どもの声に耳を傾け、権利侵害を見逃さない社会であり、子どもが安心して自信をもって自分らしく生きることのできる社会であること。		子どもアドボケート専門講座第2回「外国にルーツをもつ子ども・ユース」NPO法人シェイクハンス代表松本里美さんと大学生の滝澤ジェロムさんからお話を聴く	 <p>2021年1月25日読売新聞朝刊でも紹介されました。</p>	
●団体の社会的役割(ミッション)	すべてのこどもが、国連「子どもの権利条約」に規定されているように、こどもの最善の利益の視点で支えられ、安心、希望をもち育つことのできる平和な社会をつくること。こどもは、保護されるだけの存在ではなく、社会の一員であり意思決定を共有するパートナー。平和な社会を創ることは、こどもの声を聴き、共に考え、解決に取り組む「こども参加・参画」を進めること。その実現のために、相互がゆるやかにつながり、学び合い、意見交換しながら、互いにエンパワーメントできることを目指す。				
●団体の活動基盤	<ul style="list-style-type: none"> ・人的資源：子どもの声を聴く子どもアドボケートが安定的に派遣されること。そのためには、スーパーバイザー、管理機関としてコーディネーターが必要である。 ・物的資源：子どもアドボケートを派遣するだけでなく、子どもたちが安心して相談や話に来る場所があること。 ・活動資金：安定的な子どもアドボケートの派遣をするために、子どもアドボカシーセンターの運営費が必要である。 ・情報：常に子どもに関する新しい情報を得ることで、子どもが置かれる状況を理解する。子どもに信頼される子どもアドボケートの把握をしておくこと。 				
■ 活動報告			■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)		
<p>(1) 子どもアドボケート専門講座においては、 ①外国にルーツを持つ子ども、②生活保護世帯で育つ子ども、③親の離婚を経験した子ども、④支援を選ばない子ども、⑤社会的養護の子ども、⑥精神疾患を抱える親を持つ子ども、以上の6つの視点から、子どもたちの現状や置かれている状況を学ぶことができた。子どもアドボケートが様々な子どもの立場や子どもを取り巻く状況を理解し、課題を認識することにつながった。</p> <p>さらにこの6つの分野において(2)子どもの声を聴く(ヒアリング)を実施した。子ども・ユースからの声を直接聞き、子どもたちの思いを知るとともに子どもアドボカシーの必要性を改めて認識することができた。このヒアリングは子どもアドボケートの「聴く」スキル向上にもつながった。また、スーパービジョンの大切さを改めて認識した。</p> <p>以上の取り組みを(3)子どもの声からつくる冊子とすることで、学んだことや気付いたことを多くの人と共有できるものとした。また、ヒアリングした子ども・ユースの声は子どもアドボカシーの今後へ向けた活動や事業を考える際のエビデンスにもなると考える。また、アドボカシーを広げていく時に子ども・ユース参加・参画は欠かせないものであることを再認識した。</p>			<p>(1)子どもアドボケート専門講座 計画の50名を超える延べ230名の参加があった。「親の離婚を経験した子ども」をテーマにした講座から、面会交流支援をする全国ネットワークでも子どもアドボカシーに関心が高まり、親の離婚においても子どもの声を聴こうとするセミナーなどが開かれるようになった。</p> <p>(2)子どもの声を聴く 当初は32名の子どもから声を聴く予定であったが、当事者子どもから声を聴くことは中々難しく、方針を変え、当事者経験者であるユース（高校生世代以上）から声を聴いた。また支援する立場からも聴くことで子どもの思いがどう受け止められているかや支援者が子どもアドボカシーをどう考えているか知ることにつながると考え、支援者に対してもヒアリングを行った。合計31回52名の子ども、ユース、支援者から声を聴いた。</p> <p>(3)子どもの声からつくる冊子 冊子にしたことで重要な課題や視点を共通認識することができた。子どもの声ヒアリングでは、ユースから今後のアドボカシー展開について貴重な意見があり、その率直な意見を冊子にできたことにより、より多くの子どもアドボケートや子どもに関わる大人に伝えることができる。</p>		
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 望ましい社会状況を達成するための課題		
<ul style="list-style-type: none"> ・声を上げにくい子どもの立場について、子ども支援を実践する団体や個人から講義を通して理解する「子どもアドボケート専門講座」、理解した上で「子どもの声を聴く(ヒアリング)」を運動させることにより、子ども・ユース一人ひとりの声を子どもを取り巻く環境課題を踏まえて子どもに寄り添い聴くことができる ・実践前の研修として、「子どもの権利の理解」「境界線」「傾聴」を行った。子どもアドボカシーが子どもの権利条約に基づくものであること、子どもの権利を考え行動する時に境界線を意識することにより権利侵害を避け、エンパワメントができること、そして傾聴を理論的に理解することでよりよい実践ができることを確認した。この3つは、子どもアドボケート活動の際には必ずやっておきたい研修である。 ・スーパービジョンを行うことでアドボケートのスキル向上が図れる。 ・こうした活動は、当事者(子ども及びユース)の参画を軸に進めていくことが大切で、ヒアリングのなかで、どのユースも自身の経験や力を発揮する機会があれば参画したいと考えていることが分かった。 			<ul style="list-style-type: none"> ・子どもにも大人にも「子どもの権利」がまだまだ理解されていないため、子どもも大人と同様に一人の人間として尊重される存在であることがまだまだ認識されていない。ヒアリングにおけるユースからの声では、「学校において子どもの権利を学習する機会はなかった」というものが共通してあった。 ・子どもアドボカシーが子どもの権利の一つである意見表明権の具現化であることを子どもアドボケートはよく理解し、子どもの声を軽視しない社会を創る推進役となっていくことが求められるが、子どもアドボカシーについて学んだりアドボケートを育成する機会はまだまだ少ない。 ・子どもアドボカシーを実現するためにも、子どもの参加を心がけているが、子どものために良かれと思いつい大人だけで進めてしまうことも多い。子どもアドボカシーの原則に子ども主導、子ども参加というものがあるが「私たち抜きに私たちのことを決めないで」と言われるように、子どもに関わることである子どもアドボカシーを今後どう構築し展開していくのか、どのような場所や機会を作っていくのか、大人だけで決めるのではなく子ども・ユース参画を実現していくことが必要である。 <p>今後は、子ども・ユースが参加しやすい仕組み、子ども・ユースの声が届きやすい環境づくりをめざす。(このような形式でまとめてもよろしいでしょうか?) はい。ありがとうございます。そのような意味です。</p>		
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 活動成果のアピールポイント(自由記入)		
<ul style="list-style-type: none"> ・声を上げにくい子どもの立場について、子ども支援を実践する団体や個人から講義を通して理解する「子どもアドボケート専門講座」、理解した上で「子どもの声を聴く(ヒアリング)」を運動させることにより、子ども・ユース一人ひとりの声を子どもを取り巻く環境課題を踏まえて子どもに寄り添い聴くことができる ・実践前の研修として、「子どもの権利の理解」「境界線」「傾聴」を行った。子どもアドボカシーが子どもの権利条約に基づくものであること、子どもの権利を考え行動する時に境界線を意識することにより権利侵害を避け、エンパワメントができること、そして傾聴を理論的に理解することでよりよい実践ができることを確認した。この3つは、子どもアドボケート活動の際には必ずやっておきたい研修である。 ・スーパービジョンを行うことでアドボケートのスキル向上が図れる。 ・こうした活動は、当事者(子ども及びユース)の参画を軸に進めていくことが大切で、ヒアリングのなかで、どのユースも自身の経験や力を発揮する機会があれば参画したいと考えていることが分かった。 			この1年間の活動を通じて	子どもの権利と子どもアドボカシーの理解者が増えたこと。また44名の子ども・ユースから子どもアドボカシーに関して声を聴き、次のアドボカシー活動への土台作りとユース参画の基盤づくり	を達成しました。
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 受益者の具体的な変化(自由記入)		
			回が進むにつれ受講者が増え、子どもアドボカシーに関心をもつ人が増えた。当初は東海地域の参加者を想定していたが、九州から北海道まで全国から参加があった。ヒアリングでは子どもアドボケートが実践を通してスキルアップできた。また、ヒアリングに協力してくれたユースから、今後の活動への協力の申し出があったことは大変にうれしいことでした。子ども・ユース参画の第一歩です。		